別記様式第6

論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（　文学　） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	閻　慧
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目 (Title of Dissertation)
コミュニカティブ・アプローチの理論的検討と受容状況に関する研究

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

主　　査 (Name of the Committee Chair)	教授　高永　茂
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授　今田　良信
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授　川島　優子
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授　溝渕　園子
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	広島市立大学・教授　岩井　千秋

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

本論文は，コミュニカティブ･アプローチ（以下「CA」とする）を構成する理論と関連諸分野との関係を考察するとともに，教育の現場における受容状況について調査・分析する。本論文は，序論と終章を含む全７章から構成される。

序論では，研究背景，先行研究，課題及び研究の目的について述べる。

第２章では，①CA の誕生した背景，②CA が批判の対象としたアプローチ，③CA の特徴という３つの面から CA とは何かについて論じる。CA が批判の対象とした構造主義言語学は言語の構造に関する知識に注目する反面，実際の言語使用への関心が薄いことを指摘し，CA が言語の意味や機能に注目し実際の場面での言語運用を重視することを述べる。

第３章では社会言語学，機能主義言語学，コミュニケーション論，言語習得理論といった分野の研究成果を検討しながら CA の妥当性について論じる。Chomsky，Hymes，Halliday がそれぞれに提唱した理論を整理したのち，Canale と Swain がコミュニケーション能力には文法能力，社会言語能力，談話能力，方略能力があると主張したことを述べる。言語教育の現場から収集したデータに基づいて分析を行った先行研究を詳細に検討しながら CA の有効性を論じる。その検討の結果，CA による言語活動は①伝統的アプローチより学習者のコミュニケーション能力を高める，②学習者の動機づけや学習意欲を高める，③主体的な学習を促進するといった点で有効であるとする。

第４章では，CA の内容や授業実践に対する認識について，中国で教鞭をとる日本語教師を調査対象として実施したインタビュー調査とアンケート調査の結果を述べる。調査の回答を分析した結果，CA は中国において充分に浸透しているとは言えないという結論を得る。ただし実際の授業との間に相違が存在する可能性があるとして，これらの調査を補完するために中国における日本語教育の授業観察を行うことを述べる。

第５章では，授業観察の分析を行い CA 導入の状況やそれに影響する要因について考察する。北京市にある５つの大学で実施されている授業を対象とし，談話分析の手法を用いて分析を行った結果，CA の認知度によって教師の授業展開の仕方に違いのあることを明らかにする。

第6章ではCA導入の現状をさらに分析するとともに，授業展開に差異の見られる原因を追究し，理論と実践の両面からCAに関して総合的な考察を行う。考察の結果，CAは特定の学習者に対して，特定の学習ニーズがある場合には実用的コミュニケーション能力を高めることに有効であるが，一般の言語教育に適用する際には課題が存在すると結論づける。最後に，本論文で論じてきた理論面の考察と授業場面の分析を踏まえて，より深い学習を実現し言語運用能力を養成するための新しいコミュニカティブ・メソッドを提案する。

終章では論文全体のまとめを行い，今後の研究課題を挙げて研究の展望を述べる。

本論文は，CAの理論が形成されるに至る経緯を言語学，コミュニケーション論，学習理論という諸分野との関連から考察し，さらに社会的状況や教育現場のデータなども踏まえてCAの全体像を明らかにしている。本論文の成果は，CAを含めた言語学習理論の発展に寄与するものである。記述の厳密さには修正すべき点も残っているが，理論と実践両面への配慮，複数の方法論の併用，多面的な考察などいずれの点でも優れた論考となっている。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)